

マウリヤ王朝初期の宗教(仏教)事情

田中純男(海量)

はじめに

インドにおける仏教の歴史を語るとき、一次資料に基づこうとすれば、アショーカ王以降の歴史とならざるをえない。アショーカ王碑文によって当時の仏教あるいは他の諸宗教の動向もいくらか窺い知ることができるようになる。しかしそれ以前の状況となると、それを語る直接の資料は存在しない。したがってわれわれは古いと目される仏典の記述を頼りとして、釈尊の教え、教団の姿などを推し量ることになる。しかし周知のごとく、仏典は口誦で長く伝えられていた言葉が後世に編集されたものである。編集とは当時の編纂者たちの何らかの意図のもとで行われた創作でもある。また口誦で伝えられたといつても、長い年月の経過とともに、伝承内容に差異が生じるのは避けられない。最古のまままで伝承されたと考えられる部分と、後に改変された部分とが渾然一体となつて経典が編まれたという状況からすると、文献学的に内容に新古の厳密な区別を見出すのは一般的にいつて不可能にちかい。仏典を根拠としてアショーカ王以前の状況を推量してもやはり明瞭な姿とはいえないであろう。

この状況は古代インド社会を記述しようとする場合、どの時代についてもいえることである。山崎元一氏が古代

インドの社会を描こうとするに、初期仏典を史料として利用するにあたって、「一括使用し、記事の新旧は問わないこと」としなければならぬ事情も止むをえないことであろう。⁽¹⁾ またマウリヤ朝初代の王チャンドラグプタの宰相といわれるカウティリヤが著わしたとされる『アルタ・シャーストラ(実利論)』に基づいてこの時代を見ようともされるが、「カウティリヤ自身の著作に後世の手が加わり、西暦一〜三世紀に現在の形にまとめられた」と考えるのが妥当のようであり、「前四世紀以後の数世紀間におけるガンジス川中流域の国家と社会を背景に記された政治論」であるとする⁽²⁾ば、これもやはり、ある特定の時代の特定の地域における社会状況を見ようとする場合、よほどの注意をもって扱わなければならないことになるが、しかし記述の細部にわたって検証する方法がないとなると、われわれの視線も定まるところがない。

ここでは当時の社会、宗教事情を記している文献、メガステネス『インド誌』を取り上げたい。時代、社会が特定され、しかもその時代を記す最古の資料である。これによってマウリヤ朝初期という特定の時代の宗教という社会の一領域について検討を加えることが期待される。そこには仏教は関説されていないので、依然として仏教の姿は臆気ではあるが、関説されていないという点に着目して、当時の宗教環境のなかでの仏教の存在のありようを推測し、考察を加えてみたい。

一 マウリヤ朝

ギリシヤ人メガステネスはシリア王セレウコス・ニカトールの大使としてマウリヤ朝初代チャンドラグプタ王の都パータリプトラに派遣され、そこに滞在し、帰国後その見聞を記した『インド誌(インディカ)』を著わした。著作は散佚してしまったが、その断片が後世の歴史家たちに引用され残された。インドに派遣されたのは前三〇〇

年頃である。セレウコスとチャンドラグプタは領土をめぐる争い、チャンドラグプタが敵軍をインダス河以西に追い、勝利を収め講和を結んだのが前三〇四年か三〇三年である。⁽³⁾ それによって大使派遣となったのであるが、メガステネスが何年間滞在し、どの程度インド各地を訪れたか、詳細は不明である。⁽⁴⁾ しかし、神話的伝説などを多く含んではいるものの、彼が実際に見聞したことやバラモンを中心とした宮廷人たちからえたとと思われる情報も多く、前三〇〇年頃の社会的状況を直接知るための唯一の一次資料となっている。

チャンドラグプタは前三一七年に即位しマウリヤ朝が誕生し、前二九三年まで二四年間統治する。釈尊の生年が前四六三〜三八三年であるとすれば、入滅して六六年後の即位となる。メガステネスのパータリプトラ滞在は入滅後約八〇年である。チャンドラグプタを引き継いだのは第二代、息子のビンドゥサラーである。前二九三年から二七三年まで二〇年間治め、この時にカリンガ国を除く北インド全体を支配下に収めるようになり、大帝国の基盤ができた。⁽⁵⁾ メガステネスが見聞したのはチャンドラグプタの宮廷と社会である。

マウリヤ朝はインドで初めての帝国と呼ばれ、広大な領土を支配し、完備された政治体制をそなえた専制君主の国家であった。専制君主制は釈尊の時代から顕著な発展を開始する。釈尊当時のマガダ、コーサラ両国の覇権争いにマガダが勝利したのを最後に、それまで部族を中心とした国家はつぎつぎと姿を消し、マガダへと併合されていく。釈尊と同時代のマガダ王ビンピサーラ、アジャータシャトル以後、シシュナガ、ナンダと王朝は変遷するが、北インドのすべての中心はマガダであった。その理由としてマガダ国の開発による生産力の増大が挙げられている。鉄、銅をはじめとする鉱物資源と穀物の豊富な生産量によって、国の財政、強大な軍隊を支えることができた。⁽⁵⁾ ナンダ朝を引き継いだマウリヤ朝にいたって専制君主国家としての体制が完成したとは、つまり国家としての支配体制が有機的に円滑に機能し、社会の末端にいたるまで組織化が成しとげられたことを意味するであろう。

帝国を支えたのは巨大な軍隊と整備された官僚組織といわれる。軍隊を維持するために巨額な費用を必要としよ

うが、そのためには効率的な徴税制度が欠かせないであろうし、それを可能とするのが社会の上層から下層にまでいたる官僚制度、つまり行政機構の完備であつたろう。国民の大部分が農民であつたため、租税は安定した収入源であつた。釈尊の時代以降、都市の発展も目覚ましく、手工業、商業、交易を中心とした産業がマウリヤ朝には成熟して、帝国の繁栄を支えていた。⁽⁶⁾ 職人、商人たちはギルドを形成し、一定の自治組織として活躍したのであるが、当然のことながら国家財政への多大な貢献を義務として負わなければならなかつたであろう。農業と都市における商工業全般にわたる生産性の向上によって帝国は維持され繁栄を謳歌することができた。

二 メガステネースの『インド誌』

このような時代に、しかもその中心である都パターリプトラの宮廷に大使として過ごしたのであるから、その描写はまさに当時の社会の風景を活写していることになろう。『インド誌』からの引用文は後世の多くの歴史家の著作に見られるが、なかでも主要なものとしてディオドロス(前一世紀、前六〇〜五七年エジプトに滞在)、ストラボン(前一世紀)、アリアン(アリアノス、後一世紀末〜二世紀)、の三名が挙げられる。三名による社会、宗教に関する引用はおおよそ一致している。引用といつても原著からの直接の引用ではなく、「メガステネースはこう述べている……云々」という間接的表現ではあるが、原著の内容と大差ないと考えられている。⁽⁷⁾

まず、前三〇〇年頃のインド社会全般にわたる社会区分について、ディオドロスの引用によって見ると、七つに区分していて、その一つひとつの区分は多くは *neros* と呼ばれている。*neros* は「部分」の意味という。ストラボンも同様の使用方法であるが、アリアンは *genos* を用いる。*genos* は同一祖先の末裔と信じられている「種族」を意味するというので、ここでの社会区分を表わす語にはそぐわないようであるが、*jati* と同じく「生まれ」という意

味であるというから、アリアンは七区分を生まれによる区分と理解していたのであろう。しかしインドの *varna* の概念は時代を経るにつれ、ますますと細分化されていくようであるので、やはり *varna* の意味で用いるのは混乱をきたすことになろう。この区分をカーストと意識することもあるが、それでは後世『マヌ法典』などで規定された四ヴァルナ(カースト)とは整合しないことになる。したがってここでは七区分、七部分と理解しておくことにしたい。

メガステネースの報告する七区分について、三者の記述の主要な部分を比べてみよう。ディオドロスとストラボンとは同時代といえるが、ストラボンの方が全体的に内容が詳しいので、まずそれを示し、それと異なる特徴的な記述がある場合は、改めて言及することにする。

第一はソフィスト(哲学者)である。最高の名誉をえている。人数は最小である。各人が個人として人々の依頼を受けて、神々への祭祀、祖先への供養を行う。彼ら全員が、王たちとの共同の大会、つまり新年の大集会で、王門に集まり、果実や生類の繁栄や、政府に有益なことで文書にしたものあるいは考えたことを皆に表明する。三度外れると、法によって沈黙を強いられる。成功すれば貢納と税の免除が決定される。

第二は農民である。人口は最大である。軍役は免除され、農耕を自由に行うという面で、最も尊敬されている。喧嘩その他の理由で町に近づかない。土地は王の所有で、賃貸料と生産物の四分の一を支払う。

第三は牧人、猟師である。彼らだけに狩猟、牧牛、役獣の売り貸しが許されている。土地から有害な鳥獣を追い払うので、それに見合う手当として王から穀物を受けとる。放牧し、テントに住む。馬、象は王室のもの個人では所有できない。

第四は手工業者、交易人、日雇労働者である。ある者は国に貢納し、一定のサーヴィスを納める。武器製造人と造船者は王から賃金と食糧を受けとる。武器は司令官から支給され、船は艦隊の司令官から水夫と商人に貸しだされる。

第五は兵士である。(普段は)何もする必要がなく、酒を飲んで過ごしている。費用はすべて国庫から出る。彼らは身一つである。一旦急があればすぐに出勤する。

第六は査察官である。出来事を査察し、秘密裏に王に報告する。都市の査察官は都市の娼婦を、軍の査察官は軍の娼婦を使う。最上で最も信頼しうる人物が任命される。

第七は王の助言者、行政官である。彼らは国家、裁判所、すべての行政府の要職を占める。

別の区分の女性との結婚は許されない。職業を変えることはできない。いくつかの職に就くこともできない。しかしソフィストはその優位性のゆえに例外で、許されている。

第一のソフィストであるが、一般に哲学者、哲人と訳されるが、もっと広く学者、宗教者の意味に解釈できそうである。ディオドロスの記述には、ソフィストは一般人のために彼らの生涯にわたって祭祀を行い、また葬儀を行うとある⁽¹⁰⁾。アリアンはストラボンの内容と大同小異であるが、さらに加えて次のような引用を載せている。彼ら聖人は裸で、冬は外で日光浴を楽しみ、夏の猛暑のときは木々の下で(過ごす)。季節折々の果実、木の皮を(食べて)生活する。木の皮はナツメヤシより甘み、栄養が少ない⁽¹¹⁾。

後に詳しく述べることになるが、ストラボンは第一のソフィストをさらに二種(プラフマンとシュラマナ)に区分した引用を載せていて、そのシュラマナの説明と上のアリアンの一文とは内容が重なるので、メガステネスのシュラマナに関する記述を含めた長い文章を簡略化した引用ともいえる。

第二の農民については、三人の相違点として特に注目するところはない。

第三は三人とも大略は同じといえるが、ディオドロス、アリアンとも牧人、獵師についての一般的説明であると

思われるのに対して、このストラボンの説明では王室との関係が着目されているようである。牧人、獵師などは彼らだけの職業であり、手当として王から穀物が支給される。馬、象は戦闘用であるから王直々の管理下に置かれるのであるが、その世話の職もこの区分に入れられている。牧人といっても一般的牧人と王室関係の牧人とがいるのであろうか。

第四についてはディオドロスは簡略で、武器職人と農夫や他の人々のための道具を作る職人とが挙げられるのみである。彼らには税が免除され、国庫から扶養を受けるという。アリアンは武器職人と造船者にも言及するが、彼ら以外は仕事でえた産物で貢納するとしている。

第五の兵士については、ディオドロスとアリアンは人口に言及し、(農業に次いで)第二としている。

第六の査察官は、ストラボンの引用ではスパイとして娼婦が重要な役目を担っているのが特徴的である。ディオドロスとアリアンによれば査察官は州ごとに任命されていて、その長に報告するのであるが、そこには王と呼ばれる者がいる州と長官あるいは知事とも呼ぶべき人が治めている州のあることが知られる⁽¹²⁾。

第七、王の助言者、行政官についてディオドロスは、数は最も少ないが、高い人格と知恵で最高の尊敬を得ているとする。そして以上の七つをインドの国家体制の区分であると述べていて、それぞれの区分を越えて結婚はできず、自分の区分を越えて職に就くことはできないとし、例として兵士が農民になること、手工業者がソフィストになることを挙げている⁽¹³⁾。この通婚の規則、職業の変更の禁止については三者ともおおよそ一致していると見てよいであろう。ソフィストと職業の関係についてはディオドロスは何も述べていないが、アリアンはその区分の人でもソフィストになれるとし、ソフィストにはどの職業にでも就くことができるというストラボンの引用とは意味が異なっている⁽¹⁴⁾。

ディオドロスはこの七区分とは別の引用として、興味ある事柄を載せている。それは外国人に対応するための部

署が存在したことである。その役人は外国人の健康、死、埋葬、その後の財産処理に対処しなければならない。また裁判官は外国人に関する事項を最大の注意をもって決裁し、外国人に不正に付けこもうとする者は厳しく罰するとする。⁽¹⁵⁾

シリアのセレウコスとチャンドラグプタとの講和条約のなかに、双方の間に婚姻関係が結ばれ、セレウコスの王女の一人がチャンドラグプタに嫁いだともいわれるが⁽¹⁶⁾、そうであるなら多くの外国人が王女とともにパータリプトラに移り住んだであろう。また繁栄する都には多くの人物、物資が行きかうであろうから、外国からの交易者たちがその対象であつたと見ることもできる。

メガステネースはチャンドラグプタの宮廷を中心に生活したのであろう。その上での七区分であるので、これをカーストと呼ぶのは適切ではないであろう。いわゆるカーストの概念が広く社会全体に行きわたり、人々の生活がその影響を強く受け、社会、個人がともに厳しく規制されるような状況をこの時代、この地域に措定するにはやや早すぎるようである。古くはウパニシャッドの時代、ヴェデー八国のジャナカ王が哲人ヤージュニヤバルキヤと、またカーシ国のアジャータシャトル王が哲人ガールギヤと対論したことなどから、インド東部も早くからバラモン化されていたようでもあるが、また他方、ウパニシャッドと重なる釈尊の時代には、他の多くの思想家も現われ、百家争鳴の様相を呈していたことを考慮すれば、少なくともこの地域にあつては、社会の上下全体を視野に入れた場合、どの宗教が第一であつたか問うのはむずかしい。やはり後世に見るような厳しいカーストの諸々の規制もまだなかつたといえるのではないか。メガステネースが四ヴァルナに言及せず、それとまったく別の七区分を挙げるのもその証左になるといえる。⁽¹⁷⁾

これらの記述から知りうる当時の社会の特徴について主だった事柄に注目してみよう。

○ソフィストが社会の第一であるので、少なくとも宮廷あるいは社会の上層部においては、バラモンが勢力をもち、種々の国家的儀礼を執行し、国家的政策にも大きく関与していた。

○農業が第二として挙げられていて、人口が最大であるので、国家の財政にきわめて大きな役割を果たしていた。

○兵士は当然のことながら、牧畜、商業、交易に携わる人々も貢納の義務という点で、国家あるいは宮廷と密接に結びついている。言葉を換えれば、国家という体制のなかにきわめて細部にいたるまで、社会が精密に組織化されていた。

○国家の行政組織も宮廷を中心として、地方の王あるいは長官、知事といった統治者とその下部組織とは緊密に連携されていて、その間をつなぐ組織として査察というスパイ(探偵)による監視の目が張り巡らされていた。

ストラボンの引用であるが、王の日常、政務についての一面を伝える断片的一文がある。王が宮廷を離れる時として、戦争、裁判、祭祀、狩猟の四項目が挙げられている。⁽¹⁸⁾ この文のみで実際の詳細については知られないが、祭祀とあるのが注目に値しよう。バラモンが宮廷のなかで重要な位置を占めていたであろうから、祭祀とはバラモンによつて執行された儀式に相違ない。日々の小さな儀礼から国をあげての大きな祭祀にいたるまで、さまざまに執行されたと考えられる。少なくとも上層社会はバラモンの理念によつて統括されていた。

三 バラモンとシュラマナ

次に、メガステネースが述べるソフィスト(宗教者)について考えてみたい。メガステネースは宗教者にも強く関心を寄せ、詳細に描いている。ストラボンのみが引用している例であるが、宗教者に二種あつて、一つは山に住む人たちで、ディオニソスを信奉し、もう一つは平地に住む人たちで、こちらはヘラクレスを信奉しているという。

しかしストラボン自身、この説は神話的であり、他の歴史家たちからは反論されているとして信用していないようである。⁽¹⁹⁾ ストラボンは続けて、この区分の他にも一つ別の区分法があるとして以下に詳細に引用している。ソフィストはバラモンとシュラマナに区分される。まずバラモンについて述べている。要約して示そう。

バラモンはシュラマナよりずいぶんと名声がある。なぜなら彼らは教義の上でよりよく一致しているからである。子供は胎内にいるときから彼らの助言、世話を受け、最大の幸運に恵まれた出産となるよう願うのである。出産後は、子供たちは年齢に応じて別々の教師たちから教えを受けることになる。彼らは町の近くの森で、必要最低限の敷地に質素な生活を送る。敷物は藁あるいは毛皮を使用する。肉、性を断ち、真面目な言葉のみに耳を傾ける。彼らの話を聞きたい人とは誰とでも会う。このようにして三七年間過ごし、隠退し世俗の生活に入る。

ソフィストとして森に三七年間過ごしすというのは、あるいは子供たちは一定の年齢に達すると先生のもとに入り、学生(ブラフマチャーリン、梵行者)として何年間かを勉学に励み、その後、家に戻り世俗の生活を送るのである。⁽²⁰⁾ その慣習と宗教者の生活ぶりとが一緒になったものであろうか。ここに現われた宗教者は子供たちの先生、民衆の教師、世俗における悩みの相談役といった役目を担っているようである。先の七区分の第一に挙げられたソフィストは国家、宮廷との関係で述べられていたようで、バラモンにも宮廷付きのバラモン(プローヒタ)、一般社会で庶民と接触するバラモンの区別が存在したのであろう。

シュラマナについてはやや複雑である。五つに分類されるようなのでそれぞれ区別して示す。

①林住者 彼らのうちで最も尊敬されている。林(森)に住み、葉と野生の果実で暮らしている。樹木の皮を衣服とし、酒、性を断っている。王は使者をとおして諸事を探ねる。彼らをとおして神を崇拜し祈願する。

②医(術)師 シュラマナの第二である。人間に関して哲学する人。質素な生活、屋外では生活しない。乞食あ

るいは施された米、麦で生活する。呪術によって多くの子孫をもたらし、葉によってではなく、穀物を用いて病気を治す。

林住者と医(術)師は一日中不動の姿勢を保つという苦行を行う。

③占師、呪術師 彼らは死者に関する儀礼、習慣に精通していて、村から村へ、町から町へと乞食して歩く。

④彼ら(占師、呪術師)より洗練された人たちがいる。彼らは信仰や聖性に導くと考えられる限りにおいては死後の世界について普通に語ることは妨げられない。

⑤女性も男性と同様に、男性とともに哲学を学ぶ。女性も同じく性を断っている。

次にバラモンとシュラマナを比較しつつ、それぞれの異同を詳しく見ることにしたい。

ストラボンによればメガステネスはバラモンについて二度述べていることになる。社会区分の第一として、そしてシュラマナと区分されたバラモンである。この二種の記述から改めてバラモンを考えてみよう。

七区分のバラモンについて述べられた職能の特徴を再度挙げると、人々の依頼を受けて行う神々への祭祀と祖先崇拜、そして新年の大集会における占い(予言)である。祖先崇拜はディオドロスによれば「葬儀を行う」となる。新年の占いについてはアリアンによれば、「個人の将来については予言しない」「ささいなことは占わない」とあることから見れば、やはり国の政治と直接に関係する職務であったことになろう。先に述べたように、宮廷を中心とした社会でのバラモンの姿と、祭祀を行う伝統的なバラモンの姿とを一つに括った記述である。

それに比べてシュラマナと対置して述べられたバラモン像はより詳細である。バラモンはシュラマナより名声があるとは、社会的にも上位にあるとの意味であろう。その理由は教義(学問)があるからである。子供たちの先生となり、また彼らの生涯にわたって儀礼も行う、他人とも会うとは諸事にわたって人々の面倒をみるということであ

ろうから、社会とのつながりを保っている。同時に、森に住み、藁、毛皮を敷物として質素な生活を送るという修行者の側面ももっている。先の宮廷との関係を含めていえば、社会全般にわたって指導的役割を担い、社会とよく調和して生活している理想的なバラモン像を見ることができるといえる。メガステネースが実際目にし耳にした多くのバラモンはこうであつたらう。

他方、バラモンと区別されたシユラマナとは何なのか。sramanaの語根sram-は「疲労する、疲れ果てる」を意味し、苦行によって生じる極度のエネルギーの消耗を指している。sramanaの語が出るのは『シヤタパタ・ブラーフマナ』(二・四・七・一・二二)、『プリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッド』(四・三・二二)以降であり、修行者、苦行者、隠遁者等を意味する言葉として釈尊に近い時代にはすでに定着していた。⁽²¹⁾

前三〇〇年頃、メガステネースは上のように五つに区分したが、これは序列化でもある。⑤の女性は、ギリシャには存在しないので、その存在が特に目を引いたため加えられたと思われる。序列化には基準があるであろう。①林住者と②医師は「一日中不動の姿を保つ」苦行を行うといい、③占師、④より洗練された人たちについては苦行の言及がないので、苦行が一つの基準となろう。②医師以下は乞食で生命を維持するとあるが、①林住者は野生の果実で暮らすというので、乞食つまり他者に食を乞うか、まったく他者の介入なしに生きるのかも基準の一つとなろう。また①林住者は王との関係が言及されているが、②医師③占師は病氣治し、死者儀礼を行うという職能からすれば庶民との接触が特徴となる。④より洗練された人々は③占師より洗練されているということなのか。③占師は死者儀礼を行うが、④は死の世界について語るが、葬儀はしない、したがって③より洗練されているという意味であろうか。そうであれば浄・不浄が判断基準となつてくるといえよう。苦行、乞食、浄・不浄はどれも大きなテーマであるが、ここでは苦行を中心に考察していくことにしたい。

②医師③占師は世俗と接点をもっているが、①林住者は自己の修練をもつぱらとして完全に出世間である。

④より洗練された人々も世俗との関係が言及されないので、①林住者と同じ生活環境にいるようでもあるが、判然とはしない。これを仏教徒とする見方もある。したがって⑤女性は尼僧となる。⁽²²⁾しかしメガステネースの言として引用されたいかなる断片にも仏教を特定した言葉はない。仏教以外の例えばジャイナ教やアージーヴィカ教についても同じである。つまりメガステネースの視野にはバラモン以外の教団は入っていないことになる。

メガステネースがバラモンの目を通して修行者たちを見ているとすると、なお一層仏教などのバラモンと出自を異にするとと思われる異宗団に目が届くことはなかったであろう。バラモン、シユラマナという区分自体、もともとバラモンを優位とする立場から、つまり正統バラモンを自認する側からの区分であり序列化であつたわけで、あくまでもバラモン世界のことではなかったか。

四 二人のバラモン

バラモンといつても社会的にはさまざまな機能を果たしていたことが知られた。上のことから、バラモンは学問(教義)と修行(苦行)とのどちらかを専門にするかによって区分されるようでもあるが、次にメガステネースよりやや前の時代、アレキサンダー大王(在位前三三六～三二三)のもとで軍務に就いていた三人の証言をストラボンの引用から見ることにはしたい。当時北西インドのタキシラに駐留していた大王と直接面会した二人のバラモンについてである。

アリストプロスは將軍として戦つた。彼の説明は詳しい。⁽²³⁾

ソフィストの年長の方は頭を剃つていて、別の若い方は長髪であつた。二人とも弟子たちを伴っている。時間
に余裕のあるときは市場で人々の相談にのり、お礼として望む品物はなんでももらうことができた。呼びかけ

られた人たちは二人に目にかかるほど大量にゴマ油を注いだ。大量の蜂蜜とゴマが売られていたので、彼らはそれで菓子を作り、それで暮らしていた。二人は大王に食事に呼ばれ、立つたまま食べた。年長者は地面に仰向けに横たわり、太陽の光と雨に耐えるという(苦行を)、年少者は長さ約三キュービット(約一・八メートル)の丸太を両手で持ちあげて片足で立ち、疲れたら別の片方で立つという(苦行を)して一日中過ぐす、という近くの隠棲所で行っていることを大王にやって見せた。年少者の方が年長者よりはるかに自制心が強いことを見せた。というのは年少者は少しの距離を大王のうしろに付いていたが、すぐに自分の棲家へ向った。大王は彼を追おうとしたが、彼は大王に何か必要があれば自分から来るようにと告げた。しかし年長者の方は最後まで大王に付き添い、彼と一緒にのときは衣服や生活態度も変えた。それを誰かに咎められたとき、私は自分でやろうと決めた四〇年間の修行をやりとげたといった。大王は彼の子供たちに贈り物をした。

次はオネシクリトスの証言である。彼は大王の艦隊の司令官として陣営にいた。⁽²⁴⁾大王はこのように聞いたという。裸で苦行を修する人々がいて、非常に尊敬されている。彼らは招かれても訪ねていかず、(逆に)修行者が言うていること、やっていることに参加したいのであれば尋ねてくるように言った。そのようなわけで、大王は彼らを訪問するわけにもいかず、さりとて彼らの先祖からの慣例に反して来るよう強要するわけにもいかないの、彼(オネシクリトス)をソフィストたちと対話するために派遣したのである。彼らは町から二〇スタンディア(約四キロメートル)離れたところに一五人でおり、さまざまな姿勢つまり立ったり、座ったり、裸で横たわったり、不動のままだったり、夕方まで過ぐし、そして町へ帰っていった。太陽(のもとの行)は非常に厳しかった。非常に熱く、日中誰も裸足で地上を歩くのを容易には耐えることができないほどであった。

こうしてオネシクリトスは彼らのうちの一人カラノスと対話することになる。カラノスはペルシアまで大王に随伴し、そこで昔からの慣例に従って、薪の上に置かれ火葬されたという。対話するときのカラノスのオネシクリトスに対する態度が横柄に過ぎると、最長老で最も賢明なマンダニスによって非難される。大王は大帝国を統治するのに多忙でもあるにもかかわらず、智慧を求めようとしているのである。彼が今まで目にした武人のなかで唯一の哲人であるとマンダニスは大王を称賛したのである。

三人目のネアルコスと言である。ネアルコスもオネシクリトスと同じく大王のもとで働いた経験豊かな航海者といわれるので、やはり艦隊の司令官のような地位にあったようである。⁽²⁵⁾

バラモンは国家の事柄に従事し、王たちに顧問官として仕える。他のバラモンは自然現象を観察する。カラノスは彼らのうちの一人である。彼らの妻たちとともに哲学を学ぶ。皆の生活の仕方は厳格である。

三人の証言には一致しない点もある。二人のバラモンをアリストブロスは剃髪した年長者と長髪の年少者とし、オネシクリトスは年長者をマンダニス、年少者をカラノスと呼んでいる。ネアルコスはカラノスの名のみを挙げ、自然現象を観察するバラモンの一人としている。一人のバラモンが大王にペルシアまで付き従ったが、それはアリストブロスによれば年長者の方であり、オネシクリトスによれば年少者カラノスであるという。

カラノスが死後、火葬されたことを伝えるのはオネシクリトスであるが、この火葬の様相についてストラボン歴史家たちによる二つの説明を挙げている。一つは、カラノスは七三歳にして初めて病をえ、死を決意する。大王の懇願も聞きいれず、火葬の薪の上に金の寝台を置き、そこに自ら身を横たえ、火葬されたという。もう一つは、木で家建て、なかには葉が満たされ、その屋根の上に薪が積み上げられ、彼が命じておいてあったように閉じこもり、行列のあとで自ら火のなかに飛び込んで、木材のように家とともに燃えてしまったという。

カラノスについてメガステネスはこう言及している。火葬という自殺行為について、自殺はソフィストのあいだでは守るべき規則ではなく罪とみなされている。人生の危機に立ち向かうことができなかつたり、苦しみにひるんで水に飛び込んだり、首を吊つたり、あるいは激しい気性のせいで火に飛び込んだりする。カラノスはそういう

人であり、自制心に欠け、大王に養ってもらっていた。それゆえカラノスは非難されるのである。他方マンダニスは大王の使者が迎えにきたが、自説をとおして、たとえ相手が大王であつても何も恐れることはないと行くことを拒否した。大王は彼を称え、彼の言葉に従つた、というので称賛されている。カラノスの描写も評価も錯綜しているようである。

三人の証言全体から、アレキサンダー大王の時代のタキシラという限定された都市でのバラモンの姿を見ると、剃髪もいれば長髪もいて、弟子たちと苦行を修している。修行場は町から約四キロメートル離れていて、夕方になると町の家に帰る。家族をもっている者もいる。時間に余裕があれば市場に出かけて人々の相談にもなる。妻たちもともに哲学をする。ネアルコスの評は一般的に王に従っている司祭(ブローヒタ)のこともようでもある。ここでのバラモンはバラモン、シュラマナと区分されてはいたが、宗教者たちのすべての要素を含んでいる。

タキシラの地政を見てみよう。タキシラはインドの北西に位置するバクトリアと南東方向のインド半島とを結ぶ交通の要衝であり、商人のみならず思想の交錯するところでもあつた。より古い時代にあつては、ガンダーラはインドス河の両岸に広がり、西側の地区の都がプシカラヴァティ、東側がタキシラ(サンスクリット語ではタクシヤシラー)であつたという。前六世紀にはそこにはインドで最初の大学が創られ、学生がインド各地、東方のマガダ地方からも集まり、ヴェーダを初めとして各種の学問を修めた。⁽²⁶⁾前六世紀とは東部に興つたヴィデーハ国のジャナカ王の時代におおよそ相応するようである。ジャナカ王は『ブリハッド・アーラマヤカ・ウパニシャッド』に哲人ヤージュニヤヴァルキヤとの対論者として出る。またパンチャラー族のプラヴァーハナ・ジャイヴァリ王がバラモンのウッダーラカ(ガウタマ)に対して自分たちクシャトリア階級だけに伝わる教説として二道五火説を説く場面が『ブリハッド』(六・二・一五〜一六)、『チャンドーギヤ』(五・一〇・一〜六)に出る。これらのウパニシャッドは最古のもので、おおよそ前五〇〇年を中心として成立したと考えられている。⁽²⁷⁾前六世紀頃、西はガンダーラから東はヴィデーハ

で約九つの国が存在していて、そのうちでクル国、パンチャラー国はバラモン文化の中心地でもあつた。インド中央部全体にわたつて哲学的思弁が隆盛し、バラモンの文化が横溢していた感がある。⁽²⁸⁾

タキシラから前四世紀初頭のアラム文字が発見され、またアケメネス朝(前五〇〇〜三三二)による支配のあいだにはペルシアの貨幣がパンジャブ地方に流通していたというから、⁽²⁹⁾ペルシアの文化の影響の有無も問題になるが、しかし少なくともアレキサンダーがこの地域に到達したころには、この王朝の勢力もすでにこの地方には及んでおらず、多くの王国、共和国が存在していた。⁽³⁰⁾国といつても実態は都市国家であつたろうが、そのなかではタキシラとアレキサンダーに敵対したポーロスが比較的大きかつたという。⁽³¹⁾タキシラの王子たちはアレキサンダーに多くの贈り物をしたというので、⁽³²⁾アレキサンダーの支配を受け入れて自分たちの身を守つたのであろうが、大王の方もバラモンに対する態度に見るように、タキシラの政治、文化はそのまま尊重したであろう。アレキサンダーの時代、つまり前三〇〇年前後のタキシラにおけるバラモンのありようは、特に他のインド各地の状況と相違したものではなかつたといえよう。

五 祭祀と苦行・瞑想

インドにおける苦行の歴史は古く長いが、その源に遡るのはむずかしい。sramaṇaの語は苦行者の意味ですでに古いウパニシャッドの時代には定着していた。それ以前では苦行者は muni の語で『リグ・ヴェーダ』(一〇・二三六・一〜八)に出る。ここでのムニはシャーマニスティックな姿をとり、後世のヨーガによってブラフマンとの合一を目指す姿とは趣を異にする。本来ヴェーダ祭祀では祭官がソーマ液を飲んでの酩酊による神との合一、儀式の執行が基本であつたと思われるが、このムニは祭祀とは関連していないようで、長髪で裸または垢にまみれた衣服をまとい、

神がかりのような恍惚状態を目指して、後世のシヴァ神との関連を予想させる⁽³³⁾。バラモン圏外の文化要素が取り入れられ、バラモン文化の一員と認められた苦行者の姿と見ることができる⁽³⁴⁾。

アーリヤ人がインドに進出する前からそこにはドラヴィダの文化が広く存在していた。バラモン文化とは、じつは、インドにおいては当初小さな島のようなものであったものが、アーリヤ人の東方への伸張にしたがつて、土着の文化を取りこみ融合したものである。ヴェエダにすでにアーリヤ語系ではない語彙がみられ、それらはドラヴィダ語によって解釈される例が指摘されている⁽³⁵⁾。インダス文明のモヘンジョダロ出土の印章の跣坐する像をシヴァ神の原型と見、苦行者の源をここに求めようとする見解も早くからあった⁽³⁶⁾。パルボラはこの像について、シヴァ神と同じように四面の顔をもち、ブラフマー神のように世界の中心を表象しているとし、さらに像の左右に四頭の動物が描かれているのは世界の四方と関係するという。またこの像の頭には水牛の角の冠があるが、水牛自体が聖なる動物であるという⁽³⁷⁾。したがってこの像は神が玉座に座っている姿となる。

ヴェエダに続くブラーフマナ文献『シャタパタ・ブラーフマナ』(一四・七・二・二五―二六)には苦行(*tapas*)が梵行(*brahmacarya*)、信仰(*śraddha*)、祭祀(*vajña*)、断食(*anasaka*)と同格として扱われ、ムニとなるための行として挙げられている。この箇所は『プリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッド』(四・四・三)にも表われる。ブラーフマナからウパニシャッドにかけての時代、苦行は内面的信仰をも含む行へと意味が拡大していくようである。そうであれば、本来苦行には身体的、精神的両面の要素が兼ねそなわっていたことになる。『リグ・ヴェエダ』の長髪のムニの姿からは苦行の内容は明らかではないが、「風を帯とする」(すなわち裸体で)、「垢を衣服としてまとう」という表現から身体的苦行を推測でき、またその精神性についても、「神々が彼らの中に入る」、あるいは「忘我の境に達」するなどの表現より確認できるようである⁽³⁸⁾。

『プリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッド』(六・二・二五―二六)にすでに祭祀と瞑想(*upāsana*)とが対比されている。『荒野においては信仰を真理として瞑想する人々』はブラフマンの世界に到達し、再びこの世に帰ってくることはない。それに反して「祭祀によつて〔祭司に〕与えることによつて、禁欲によつて諸世界を獲得する人々」は、諸世界に再び生まれてこの世に帰ってくることとなるという、死後の人間の辿るべき二つの道を説いている。『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』(五・一〇・一・三)にはやや異なつた表現で、「荒野において信仰を禁欲として瞑想する人々」と「村において〔神々と祭司に〕与えることは祭祀のメリットを得るためであると瞑想する人々」と対置している。上の二つのウパニシャッドより成立の新しい『ムンダカ・ウパニシャッド』においてはこの優劣の対比はより激しい。「祭祀の行為は、より劣つていると言われる。それを、より優れているとほめる愚かな人々」(二・二・七)、「愚かな人々は祭祀のメリットを最良であると考え」(二・二・一〇)、「荒野において禁欲と信仰の生活をし、静穏であり、知っていて、乞食の生活を送っている人々……不死のプルシャ……がいる所へ行く」(二・二・二一)。このように荒野、禁欲、信仰、乞食という語によつて表象される世界に住む者つまり苦行を修する者、苦行という方法そのものの重大性がきわめて強く意識される時代となつた。

精神的苦行について仏教側の伝承を考えてみよう。釈尊の時代には多くの思想家、修行者が存在していて、六師外道に代表されるような人々によつて論争が繰りひろげられていた。そのなかでも後世まで長く影響を及ぼしたため、よく知られているのがジャイナ教の開祖マハーヴィーラとアージーヴィカ教のマツカリ・ゴースアラであるが、両者とも苦行を強調した点で一致している。釈尊は初め苦行を修したが、後に瞑想へと重点を移したとされる。修行の結果、到達した境地は、六師の一人アーラーラ・カーラーマによれば無所有処であり、もう一人ウツダカ・ラーマプッタによれば非想非非想処であつたとされる。釈尊もこの二人に師事したという⁽³⁹⁾。伝承によれば、マハーヴィーラは二四番目に出た改革者といわれ、釈尊も過去七仏の第七の仏といわれるようになる。これらの伝承に何らかの真実が認められるとすれば、古い時代から苦行・瞑想の実修法の伝統が存在していたことにならう。

精神的苦行とはヨーガの実修である。ヨーガの伝統は古く、すでに古ウパニシャッドにおいてヨーガの実践法、それによつてもたらされる身体的変化と精神的境地について深く考察されている。「認識より成る人間は生気の認識を捉えて、心臓の内部の虚空に横たわり、熟睡時に心臓から心嚢へ達し、ヒターという七万二千の血管を通つて再び心嚢において休む」(『プリハッド・ナーヌヤカ・ウパニシャッド』二・二八―一九)。また別のウパニシャッドにはヨーガの実修法として、息のコントロール、感覚器官のコントロール、瞑想、精神集中、熟慮、沈潜の六つが挙げられ(『マイトリ・ウパニシャッド』六・一八)、「口蓋の上に〔舌の〕先端を反転させ、感覚器官を〔息および思考と〕結合させて、人は偉大さとして偉大さを観察すべきである。それから、人は自己を有しない状態に到達する」(『マイトリ』六・二二)とその結果としての境地を明示している。

祭祀を執行するバラモンのなかから、自ら真理を探究しようとする者が出、苦行を実践する。身体的苦行へと先鋭化する者は特殊な集団へと特化していく。他方、精神的苦行を重視する者は乞食、断食(食物の制限をも含む)、瞑想(ヨーガ)へと重点を移す。このような時代の大きな潮流のなかでの一つの新興の宗教運動として仏教を位置づけることによつて、仏教の存在意義についてもあらためて新しい視点を提供することが可能となろう。

六 仏教の状況——まとめにかえて

ストラボンの引用によれば、「インド人の葬儀は簡素で、墓は小さい」という。またアリアンは次のように引用している。「インド人は死者のために記念物を建てない。生前に示した徳と彼らを称える歌で死後の記憶を保持することとで十分であると考えている」。メガステネースの記録のなかでインドの宗教的習俗に触れたものは、この短い一文のみであるが、葬儀は簡素、墓は小さいとは、ヴェーダに由来する葬儀も一般には簡素化されて営まれていて、墓

の上には土がやや高く盛られていたことを示すのであろう。墓に記念物を建てないという点、釈尊の遺骨を納めたストウーパはどうであったのか。メガステネースは見聞きしなかったのか。存在していたとしても規模は小さかったのか。都周辺にはなかったのか。庶民のあいだではチャイティヤ信仰が釈尊の時代以前から盛んだったようであるが⁽⁴⁰⁾、目にしたことはなかったのか。メガステネースの記録がたまたま引用されなかっただけであるのか。疑問は多い。

ここで仏教団の動向を考えてみたいが、ここでは『スッタニパータ』⁽⁴¹⁾を資料として用いたい。後世の編纂になるとはいえ、最古の詩節を多く含んでいるもので、アシヨーカ王(在位前二六八―二三三)以前に成立したと考えられている。中村氏は『スッタニパータ』の成立時期を想定するよりどころとして次の四点を挙げている。①ここに出てくる修行者たちは樹下石上、岩窟の中、あるいはせいぜい庵に住む程度であったので、大寺院の作られる前の段階であった。②尼僧が登場しないので、それ以前の古い段階を示している(メガステネースは尼僧に言及しているから当然それ以前とする)。③ストウーパ、チャイティヤ崇拜に言及していないので、その崇拜が一般化する前の段階を示している。④原始仏教は四諦(真理)を説いたとされるが、ここでは真理はウパニシャッド的な真実という意味で用いられる場合が多い⁽⁴²⁾。

メガステネースが述べた、男性とともに哲学をする女性を尼僧と考えているが、これはすでに述べたようにバラモン世界のなかでの話である⁽⁴³⁾。チャイティヤ崇拜は仏教以前から存在していたであろうから、その言及がないとは、当時のバラモン系修行者グループの信仰と一般庶民の信仰とは、そもそも存在する領域が異なっていたことを意味することになるであろう。しかし樹下、岩窟、庵などに住むこと、真理(sacca, satya)のウパニシャッド的理解という点は重要であろう。住居については、メガステネースによるシユラマナの記述、タキシラの二人の苦行者とは相応し、荒野における瞑想によつて真理に到達しようとするのはウパニシャッド全体を通じての修行の大前提であっ

た。ウパニシャッド文献には修行者たちの生活ぶりや修行場所などについての詳しい言及はほとんどない。しかしすでに見たように、荒野、禁欲、信仰、乞食、瞑想などの語から見えてくる苦行者像は『スッタニパータ』に見る修行者像と変わらないようなのである。以下に『スッタニパータ』よりやや多く引用して、その姿を追ってみよう(数字は詩節の番号である)。

在家者の諸々のしるしを除き去つて、出家して袈裟の衣をまとう(六四)
 独座して禅定を捨てることがない(六九)

世に遠ざかつて杜の中で瞑想する聖者・修行者(二二二)

へバラモン(の)母から生まれた人をバラモンと呼ぶのではない。……無一物であつて執着のない人……をへバラモン(と呼ぶ(六二〇))

在家者、出家者とのいざれとも交わらず、住家がなくて遍歴する人(六二八)

出家の身となり、托鉢の行を実践する(七〇〇)

托鉢にまわり歩いてから、村のほとりにおもむき、樹の根もとにとどまつて……瞑想し……ついで夜が明けたならば、村里のほとりに去るべきである。(信徒から)招待を受けても、また村から食物をもらつてきても、決して喜んではならない(七〇八〜七一〇)

妄執を離れて、執着することなく、よく気をつけて、修行僧は遍歴すべきである(七四二)

(俗事から)離れて独り居ることを学べ(八二二)

家を捨てて、住所を定めずにさまよい、村の中で親交を結ぶことのない聖者(八四四)

アタルヴァ・ヴェーダの呪法と夢占いと星占いとを行なつてはならない。鳥獣の声を占つたり、懐妊術や医術を行なつたりしてはならぬ(九二七)⁽⁴⁴⁾

修行者は……村の人々と親しく交わつてはならない(九二九)

修行者たちの理想は昔のバラモンであつた。彼らは、

自己をつつしむ苦行者(二八四)

四十八年間、童貞の清浄行を行なつた(二八九)

不淫の行、戒律、正道、温順、苦行、柔和、不傷害、耐え忍びをほめたたえた(二九二)

祭祀を行うときにも、決して牛を殺さなかつた(二九五)

為すべきことを為し、為してならぬことは為さないとすることに熱心に努力した(二九八)

昔のバラモンとは、メガステネスの区分でいえば、林住者に当たるであろう。古代インドにおける伝統的で正統な苦行者のイメージとして、世間から離れて林(森)で行ずる林住者像があつた。仏教徒はそれを目指していたことになろう。『テラガター』⁽⁴⁵⁾によれば彼らの住所は山の頂(二三)、密林(三二)、山の岩石の裂け目(四二)、庵(五一)、森(六二)、洞窟(一八九)などである。彼らの姿が伝統的苦行者と変わらなかつたとすれば、仏教僧として人々の関心を特に引くことはなかつたであろうし、ましてやパトリプトラにいるバラモンたちの注目するところではなかつた。彼らと生活をともにしたであろうメガステネスにしても同じであつたろう。

メガステネスから約三〇年後に、アショーカ王が即位する。アショーカ王の時代になると宗教をめぐる状況は一変するように見える。歴史的大転換が一夜にして生じたとは考えられないので、『スッタニパータ』に見たような状態以降の歴史の変遷の経緯と変遷をもたらした要因とを検証しなければならぬ。ここではマウリヤ朝初期を仏

教の大変革の時代と捉えておくことにとどめたい。

註

- (1) 山崎元一『古代インド社会の研究』、刀水書房、一九八六年、一九頁。
- (2) 同前、二〇―二二頁。
- (3) 中村元『インド史II』(中村元選集〔決定版〕第六卷)、春秋社、一九九七年、五五八頁。J・W・ドウ・ヨング(塚本啓祥訳)『インド文化研究史論集』、平楽寺書店、一九八六年、二二四頁では、前三〇五年とする。
- (4) R. C. Majumdar : *The Classical Accounts of India*, Calcutta 1951, p.26 によればアリアン(アリアノス)は、しばしば王を訪れた」とする。しかし確かな証拠はないとする (p.461)。中村『インド史II』、五五八頁。
- (5) 中村元『インド史I』(中村元選集〔決定版〕第五卷)、四二二頁。
- (6) 山崎元一『アシヨールカ王伝説の研究』、春秋社、一九七九年、二八二頁。
- (7) 中村『インド史II』、五六〇頁。
- (8) 同前、二四〇頁。
- (9) Majumdar, op.cit., p.263-8.
- (10) Ibid, p.237.
- (11) Ibid, p.225.
- (12) Ibid, p.226, 238.
- (13) Ibid, p.238.
- (14) Ibid, p.226.
- (15) Ibid, p.238.
- (16) 中村『インド史II』、四二頁。ドウ・ヨング、前掲書、二二五頁。
- (17) 中村『インド史II』、二二六頁。山崎『古代インド社会の研究』、三三六頁。

- (18) Majumdar, op.cit., p.271.
- (19) Ibid, p.273.
- (20) 渡瀬信之『マヌ法典』、中公新書、一九九〇年、六四―六七頁。
- (21) 拙稿「初期仏教時代の修行者」(『豊山教学大会紀要』第一五号、昭和六二年)参照。
- (22) 中村『インド史II』、二七三頁。「より洗練された人々」を「仏教あるいはそれに近い宗教を含めると考えてよいであろう」とする。したがって⑤女性は仏教の尼僧となるのであろう。
- (23) Majumdar, op.cit., p.275-6.
- (24) Ibid, p.277.
- (25) Ibid, p.278. ドウ・ヨング、前掲書、二〇八頁。
- (26) E. Lanotte: *History of Indian Buddhism*, Louvain-la-Neuve 1988, p.100-1.
- (27) 辻直四郎『インド文明の曙』、岩波新書、一九六七年、七頁。同『ウパニシャッド』、講談社学術文庫、一九九〇年、三四頁。
- (28) 中村『インド史I』、二四七―二五五頁。
- (29) 中村『インド史II』、一一―一二頁。
- (30) 同前、一三―二〇頁。Lanotte, op.cit., p.105-9.
- (31) 中村、同前、二二頁。
- (32) Lanotte, op.cit., p.106.
- (33) 辻直四郎『リグ・ヴェーダ讃歌』、岩波文庫、昭和四五年、三三六頁。
- (34) K. Werner (ed.) : *The Yogi and the Mystic*, London 1989, p.25.
- (35) A. Parpola: *The Roots of Hinduism*, Oxford UP, 2015. 例えば puja (供養) はプロト・ドラヴィタ語の pucu に (p.174) 同く vata (バンヤンの木) は vatam (紐) に由来する (p.310)。
- (36) A・L・バシヤム(日野紹雲他訳)『バシヤムのインド百科』、山喜房佛書林、平成一六年、二八頁。
- (37) Parpola, op.cit., p.178, 194-5.

- (38) 辻、前掲書、三三六頁。
- (39) 中村元『ゴータマ・ブッダ』(中村元選集〔決定版〕第二二巻)、春秋社、一九九二年、二四〇―二五四頁。
- (40) 杉本卓洲『仏塔の研究』、平楽寺書店、一九八四年。特に九一頁では、ハラッパ―出土のしだれ柳とその根元に台座が描かれている印章を挙げ、聖樹信仰の証としチャイティヤ信仰との関係を予想している。
- (41) 中村元訳『ブッダのことば―スッタニパータ―』、岩波文庫、二〇一〇年版。
- (42) 中村、同前、四三四頁。
- (43) ターバルは、メガステネースによるシユラマナの区分は仏教やジャイナ教のシユラマナを指すものではないとする(R. Thapar: *Asoka and Decline of the Mauryas*, Oxford UP, 2nd impression 1998, p.39)。本稿ではその結論に至る過程を細かく検証しようとした。
- (44) メガステネースの記したシユラマナの職能と重なるこれらの方術は、社会(世間)との接触をもたらし、世間の称賛や誹謗を招くがゆえに禁じられた、と理解することができる。
- (45) 中村元訳『仏弟子の告白―テラガーター―』、岩波文庫、一九八三年版。
- 尚、本稿で使用したウパニシャッドの翻訳はすべて、湯田豊『ウパニシャッド』(大東出版社、二〇〇三年)による。

付記

本稿は平成三〇年七月の豊山教学大会において「マウリヤ朝初期の仏教事情」と題して発表した内容を、やや範囲を広げて論じたものである。